

巻 頭 言

医師人生を振り返って改めてお伝えしたいこと

小 山 信 二

(医療法人信山会南城つはこクリニック理事長・院長)



皆様、ご健勝にお過ごしのこととお喜び申し上げます。多くの方々が呼吸器外科に日々邁進し、呼吸器外科学の発展と患者さんの予後と QOL の改善にご尽力され、人類の福祉福利の向上に貢献されておられることに敬意を表します。

さて、私の医師としての歩みを振り返ると、①学生時代：昭和 45 年に東京大学に入学し、工学部卒業(船用機械工学：平田賢教授)、教育学部学士入学(教育行政学：五十嵐顕教授)、昭和 58 年 3 月に富山医科薬科大学医学部を卒業しました。医学生時代に同期の柴田良子さんとラット大腸癌の化学発癌実験でお世話になった、第一外科に 31 歳で入局しました。②大学医時代：呼吸器外科を専攻し、大学院形態系に進学し、山本恵一教授(※)と龍村俊樹講師にご指導いただき、「肺癌に対する 5-FU の経気道投与方法に関する研究」で学位を得ました。出身地の長野県小諸厚生総合病院に 2 年間出張した後、山本教授と龍村先生のご支援を得て、アメリカ合衆国メリーランド大学に留学しました。ノーベル化学賞を 2 回授与された Sanger 博士の弟子である、Dr. Dube 教授にご指導いただき、当時ポストクの赤田辰治さんに世話になり、約 4 年間、ラット線維芽細胞成長因子 (FGF) ゲノム遺伝子を研究しました。帰国後、胸腔鏡時代で、杉山茂樹先生の下で 4 年間ほど働きました。③勤務医時代：生命保険会社医長(社医)、相模原友愛病院長(高齢者医療：林隆文理事長)、雪国萌気園二日町診療所長(在宅医療：黒岩卓夫理事長)、南魚沼市立城内病院長(地域医療)等を経験しました。④開業医時代：沖縄県南城つはこクリニックを 57 歳で開設して 12 年目になります。18 歳に高校卒業後、12 ないし 13 年毎に大きな節目を乗り越えてきたことに気づかされます。

学会には手術成績に統計学的な検討を加えてたびたび発表しましたが、術後呼吸機能低下に関与する因子を検討して出血量が唯一有意差を認める因子だったことは忘れられない記憶です。胸腔鏡手術や開胸法の工夫などの進歩で出血量は減り、これも術後呼吸機能温存に貢献していると思います。最近、高齢者医療では貧血や低酸素の改善が大切と実感し診療しています。

また、学位論文は肺癌に対する 5-FU の経気道投与方法の研究でしたが、病理的な検討で気道腔側から癌細胞壊死が観察され、経気道投与方法の効果を実証しました。最近、喘息や COPD に対する薬やインフルエンザ治療薬など、経気道投与方法は多用されています。

さらに、aFGF 及び bFGF 遺伝子ゲノム領域をクローニングしましたが、そのゲノム領域はそれぞれ 120 kbp (kilo-base-pair) ほどにわたり、ラット DNA を 20 kbp ほど置換するリコンビナント λ ファージ DNA でカバーする aFGF 遺伝子領域 26 クローン、bFGF 遺伝子領域 25 クローンが得られました。そこで明らかになったことは、ラット aFGF 及び bFGF 遺伝子ゲノム領域の知見ばかりでなく、遺伝子選択を支配する 2 つの原理の仮説です。第一は、λ ファージ DNA に置換したラット DNA の相違性を基礎として、FGF 特異的配列によって FGF 遺伝子 DNA クローンが選択され、それはレトロスペクティブに明らかになります。第二は、λ ファージ DNA の同一性を持つ個体数に対して、FGF 特異的配列を持つ個体数と、FGF 特異的配列を持たない個体数によって、クローニング確率が予め決まっているということです。確率が予め計算できるので選択はプロスペクティブです。一見必然的に見える生物学過程、例えば抗原特異的抗体の産生には出会いという確率的過程が存在し、従って、「抗体は個々の人の間に多様性がある」と仮説できます。

終わりに、皆様方のますますのご健勝を祈念し、巻頭言執筆の機会を与えてくださったことに感謝し、筆をおきます。

※令和 2 年 10 月 21 日 ご逝去。享年 92 歳。